

連載
講座

第40回

“民はよらしむべし”は 安全安心の確保による信頼— 保科正之・松平信綱のコンビ（一）

作家 童門冬二

後藤新平の「帝都復興計画」

大正十二（一九二三）年九月一日に、関東地方に大地震が起った。死者九万一千八百二人、行方不明四万二千二百五十七人などの大被害を受けた。たまたま時の内閣が倒れ、新しく山本権兵衛による内閣が組織された。この時内務大臣として入閣したのがかつて東京市長を務めた後藤新平だ。新平は、内務大臣としての仕事を一にも二にも、「焼けた東京の復興」

に力点を置いた。かつて東京市長だったからだけではない。かれはかねてから、「東京は、日本国の首都である。それに相応しい都市美が必要だ」

と考えていた。したがって、当時かれが住んでいた東京の姿は、自分の居住経験からしても必ずしも満足ではなかった。

「もっと、夢と美を付与する必要がある。世界でも誇れる首都にしたい」

という理想を持っていた。そのためにかれの立てる都市計画は常に夢を実現しようとする傾向が強かったので膨大な予算を必要とした。そのため度々後藤の提出する案は“大風呂敷”として、なかなか政界では受け入れられなかった。

「しかし、今度は違うぞ」

と後藤は意気込んだ。「この災害の禍を福と変えるような新東京を建設する」

と考えたのである。したがってかれの立案した

「東京復興計画」は、かつての東京の市街を復活したり復元したりするのではなく、

「新しく創造する日本の首都」であった。この時かれが最も力を置いたのが、

「焼土の取用とそこに実現する新しい都市の建設」

である。理想としては誰にも頷けるが、頷かないのは当時の政界であった。それは、後藤の主張する「焼土の取用」といっても、全て地権者がいる。これが微妙に政治家に絡み合っていた。後藤は何が何でもこれを全て国有地として、模範都市を築こうという考えだ。地権者と密接な関わりを持つ政治家たちは、

「そんなことはできない」と反対した。したがって、後藤の理想的な都市建設は、まず焼けた土地の取用という段階でつまづいてしまった。そして、結局はこの案は幻の計画として潰えることになる。

後藤のいわゆる“大風呂敷計画”で実現したのは、現在の東京都内の“昭和通り”だけだろう。惜しいことだった。このことは、理想の実現には必ず理解者と協力者が必要だということを物語る。後藤は純粋な民思いの政治家だったが、その点でやはり周りの人間から見れば、すぐには同調し難い面も持っていた。

後藤は歴史が好きだった。したがって、当然こういう災害時には過去の復興計画などにも関心を持ち、その内容を知り尽くしていたに違いない。今回書く江戸の復興計画は、このシリーズの第一

回で紹介した“明暦の大火”の時に、焼け落ちた江戸城の天守閣を復元せずに、その費用を被災者の救済に回そうという幕府の首脳部保科正之と松平信綱たちのヒューマンな政策理念によった話を紹介した。今回は、その保科と松平が手を組んで、「いかに、市民のために、江戸の町を防火都市化しようとしたか」

という過程と、掲げた理念のことである。

信綱の江戸復興の理念

徳川幕府の政治理念は、徳川家康が固めた。家康の民への姿勢は、有名な、

「民は由（よ）らしむべし・知らしむべからず」

である。この言葉は現在、後半の知らしむべからずが、情報公開の理念に反するという一方で、非民主的な言葉だと解釈されている。しかし前半は後半とは違う考えであって、必ずしも否定すべきものではない。というのは、

「政治は、民の信頼によって成り立つ」

ということの裏返しであって、すなわち、

「政治は必ず民の信頼を得る必要がある」

という意味だ。決して悪い意味ではない。当時の幕府首脳部である、保科正之や松平信綱は家康が示したこの理念を正確に理解し、その実行に努力した。特に松平信綱は、自分の領国である川越（埼玉県川越市）で起った大火後の復興計画を実現した人物だ。かれの努力の跡は、現在も残っていて多くの観光客を呼び寄せている。かれの政治理念は、

「民が頼りにするような政治は、民の生活の安全と安心を保障することだ」

と考えていた。だから災害復興の時には、この理念をさらに濃度を加えて、より民側が、「政治に対する信頼感」を強める努力をすべきだと思っていた。明暦の大火後に、かれが江戸で実行した復興策は、この考えを貫くための一環だった。そのためには「まず江戸城を頼られる民の拠点として、常に安全と安心を保つ必要がある」

と策した。このことは、当時の事情から現在に通ずるような必ずしも民主的な考えではない。信

綱も幕臣だから、当然、

「幕府の威力をしっかりと確立する必要がある。民が頼れる政府とは、政府自身が信頼感を得るような丈夫で硬度を持った組織でなければならない」

といういわば「幕威の確立」とは決して無縁ではない。しかしそれにしても、この時かれが次々と打った特に後藤が考えた「焼土の活用」については、目を見張るような策が沢山ある。後藤にすればもしこのことを知っていれば、

「おれにも、松平信綱ほどの力があればな」

と唇を嚙んだことだろう。信綱の力というのは、結局は「権力の行使」だ。後藤に全くその力がないわけではなかったが、しかし当時の派閥政治の実態から考えれば、

「それで得をするか損をするか」

というモノサシですべてを考えるから、どうしても利権とか利益とかの金のことに話が行ってしまう。そんな時に、

「焼けた土地を全て国家が収用する」

などと言い出せば、大ごとになって昔でいう一揆も起りかねない。そのために利害を無視し、市民に安然と安心を保障しようとする後藤の案は、「大風呂敷だ」

と言われてしまうのである。松平信綱が考えた「江戸復興策」の対象となる江戸市中は幸いにして徳川幕府の管理地域だった。つまり後藤が、「国家の手に収用したい」という地域はすべて、すでに収用済みの土地だったのである。しかし、そこにまたドラスティックな策を持ち込めば、当然これは他の老中や大名たちの反対を受けざるを得ない。そのことははじめから予想された。しかし強力な支持者がいた。それが保科正之だ。保科は松平に、

「どんどん思い切った策を打ってほしい。わしも民の暮らしを重んずることにおいては、会津において実行済みだ。反対者に対しては、わしが防壁となりあるいは説得者になろう。松平殿、どうぞ大船に乗った気で事業をお進めください」

と力強い支持を示した。（この項続く）